# 渡り鳥との共生を核とした持続可能な地域づくり

宮城県大崎市　市長
伊藤康志氏

宮城県大崎市長でございます。ありがとうございます。今日はお招きをいただいて、この渡り鳥、とくにマガンに選ばれた大崎市の取組を報告できますことに感謝をいたします。

報告を申し上げる前に、お礼を申し上げなければならないと思っております。4年8カ月前の東日本大震災のときにも、大変に皆様方にお世話になりましたが、実は2カ月前の9月11日にございました関東東北豪雨の折にも皆様方に激励、お見舞いをいただきましたことを厚くお礼申し上げたいと思っております。突然の大雨で、中小河川を中心に、約3000ha、700世帯が浸水されました。2300人もの避難者等々があったところです。また刈り入れ、取り入れ直前の農作物の被害も心配をいたしました。4年8カ月前の生きた体験（東日本大震災）が残っておりましたので、応急対応、また避難者支援、被災者支援等々に取り組んでまいりました。おかげさまで、人的被害がなかったことに安堵いたしております。今、懸命の復旧、そしてまた被災者支援を行っているところです。たくさんの支援物資もいただきましたこと、厚くお礼を申し上げたいと思っております。

さて、今日のテーマでございますが、大崎市においでいただいたことのある方もいらっしゃると思いますが、宮城県の北部にございます。合併をいたしまして来年3月で10年を迎えます。約14万近い人口があり、面積は800平方km、東西に80kmという大変に長い大崎市でございます（図─1）。鳴子温泉、あるいはササニシキ、ヒトメボレの誕生の地、古川など1市6町が合併をいたしました。現在、

図─1

図─2

宝の都（くに）・大崎を目指して、まちづくりを進めています。西の方に鳴子温泉があります。鳴子温泉には、9種類の泉質、400本ほどの源泉。源泉かけ流しということで、たくさんの方々においでいただいています。「温泉の横綱」がご縁で、本物の横綱（白鵬関）にもおいでいただきました（図―2）。写真左側、本物の横綱の隣にいるのは相撲取りではなくて私でございます。4年8カ月前の震災の風評被害がありましたので、どうぞみなさんおいでくださいとお迎えを申し上げているポスターです。

大崎の恵まれた資源、宝は東にもございます。今日のテーマでございます、2つのラムサール条約湿地に登録された蕪栗沼、そして化女沼です。10kmほどの距離のなかに渡り鳥の重要な越冬地が2つあり、そこがラムサール条約湿地になっています。この地図の約10km北の方に伊豆沼、内沼というのがあります。宮城県の北部には3つのラムサール条約湿地があり、ラムサールトライアングルを形成しているところであります。蕪栗沼はマガンの国内最大級の越冬地です。また、化女沼はヒシクイ、シジュウカラガンなどの国内最大の越冬地です。

今日の報告は、そのなかの蕪栗沼についてです。蕪栗沼の周辺には、広い水田があります。「蕪栗沼・周辺水田」というのが条約湿地の正式名称です（図―3）。水田が名前に入った世界初のラムサール条約湿地ということで、水田が稲作の生産だけではなく、渡り鳥や生物の多様性を支える重要な場所であるとの認識を得た記念すべき湿地です。ここではワイズユース（賢明な利用）の取組をさせていただいているところであります。

先程来、皆様より大型鳥類の紹介がございましたが、この報告の主役でありますマガンについて、改めてご紹介申し上げますと、翼を広げますと150cmぐらいの大型の水鳥でございます（図―4）。主に田んぼの落ち穂などを餌としています。今日の主役の鳥たちは肉食系の水鳥が多いですが、私のところのマガンは草食系ということになっております。毎年大陸シベリアから大崎市を目指して、多くの渡り鳥が飛来しております。ここで動画をご覧いただき、その飛来しているマガンの楽園、蕪栗沼に皆様方をご案内申し上げたいと思います。躍動的な大パノラマをお楽しみください。周辺の田んぼでお腹いっぱい落ち籾を食べた渡り鳥が、夕方蕪栗沼にねぐら入りする様子です。

マガンの習性だと思いますが、行く時は大きな群れで出発して、帰る時は中小規模の群れで戻ってくるようです。現在5万羽ぐらい飛来しています。まもなく2桁、10万羽になります。この3つのラムサール湿地で18万羽程度飛来し、日本に飛来するマ

図―3

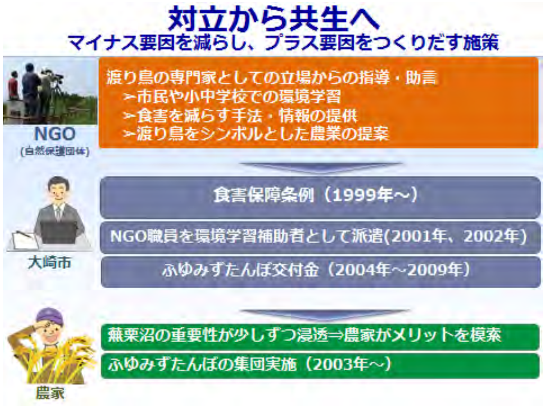
図―4

ガンの8割が越冬するということでございます。これだけ集中する理由は、ひとつには、地球温暖化の影響ではないかと思っております。日本各地で越冬していたマガンでしたが、北の方に偏ってまいりました（図―5）。それと、ねぐらや餌場となる湿地や水田の開発が進むなかで、大崎市のある宮城県北部には、この渡り鳥マガン類の越冬にとって適した湿地が残されていた。加えて、周辺に大崎耕土（広大な水田地帯）と言われる豊富な餌場があったということ、これが集中する要因ではないかと思っております。

その渡り鳥とは、今でこそ共生のまちづくりを進めておりますが、最初からそうであったわけではありません。たくさんの渡り鳥が越冬地を求めて訪れるようになりましたが、農家の方々からすると大事なお米を食べられるのではないかということの心配から、一時期は害鳥扱いもされました。一方、NGO、NPOの方々は保護という立場を取っていました。それぞれの立場で大分利害が相反する時代も重ねました。しかし、お互いが協調し合うなかで、知恵の共有がなされ、対立から共生へと発展していきました（図―6）。そして、NGOが持っている専門的な渡り鳥の知識と農家の方々の良いお米を作りたいという願い、行政の調整機能、こういうものから生み出されたものが、「ふゆみずたんぼ」という手法です。

「ふゆみずたんぼ」は、本日他の方々からもご紹介がありました。冬期湛水栽培は、私の地域でも以前より一部の農家が行っておりました。渡り鳥が多くなりましてから、地域的に集団的に取り入れることにしました。冬に取り入れが終わった田んぼに水を張って、まさに「ふゆみずたんぼ」というねぐらを提供する試みを行いました（図―7）。そのことによって、渡り鳥もゆっくり、ゆったりと越冬できるということになりました。そして、気がついてみたら、美味しいお米がたくさん収穫できるようになりました。まさに、三方一両得のようなかたちになりました。

この取組は、農家が害鳥として見ていた渡り鳥にねぐらを自ら提供し、無農薬・無化学肥料栽培




図―6

図―5

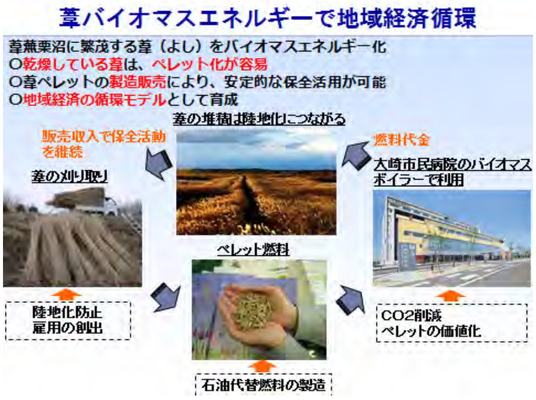
図―7

という自然共生型の稲作栽培を行う。結果として、大変においしい、安全安心なお米が生産、高く取引されるようになりました。さらに、お米作りだけでなくて、地元の企業にもこの連携が広まりました（図―8）。大崎市には7つの造り酒屋がありますが、もっとも大きな一ノ蔵というところが、ふゆみずたんぼのお米と酒米として契約しました。そのままずばり「ふゆみずたんぼ」のお酒として売り出されています。お米もふゆみずたんぼ米でありますが、お酒も製造されています。今日皆様方にもご賞味いただけるようにお持ちをさせていただいたところでございます。

加えて、新たな取組といたしまして、広大な蕪栗沼に自生しておりますヨシを、かつては野火を行っていましたが、この取組に学び、一部のヨシを刈り取り，ヨシ・ペレットを製造するようになりました。そして、現在、大崎市民病院のバイオマスボイラーで活用して、CO2の削減とともに、ヨシの価値化を進めさせていただいているところでもございます（図―9）。

そしてこの取組を、現在実践している方々だけではなくて、次の時代に伝えていこうというなかで、環境教育プログラム「おおさき生きものクラブ」を設立しました。現在279名の子どもたちが参加しています。このように、蕪栗沼・周辺水田を核に様々な取組を開始しております。生き物調査や農業体験など、たくさんの体験をしていただいているところであります（図―10）。この取組が大崎のなかだけに留まることなく、さらに広域的な連携も進めてまいりました。今日すでに発表された佐渡市、この後発表される豊岡市、小山市などと共に、「世界一田めになる学校 in 東京大学」などで、各市の子どもたちが連携を密にして、お互いの実践例に学びながら広域連携を進めているところです。

さらに、農業の分野だけではなくて、この取組が、シティプロモーション、あるいはツーリズムにも大きく発展をしてきました。先ほど来、イメージキャラクターの紹介がたくさんありましたが、スライドの左にありますのが、マガンのキャラクター「パタ崎さん」




図―9

図―8

図―10

です。とっても居心地のいい大崎に永住したいと申請がございましたので、市長として許可をしました。その代わりに、世界を、そして日本中を飛び回ったなかで知った大崎の良さを、国内外や世界にPRしていただきたいということで、広報大臣に任命しました（図−11）。

このパタ崎という名前は、パタパタと大崎を大いに宣伝して飛び回るという意味で、子どもたちが命名いたしました。写真では見えないですが、背中に大きなリュックサックを背負っています。大崎の恵まれた資源や素材などの宝を大いに宣伝していただくという任務を負っています。子どもたちに大変人気で、最近は、市長さんは来なくてもよいから、パタ崎さん来てくださいということもよくあります。

また、先ほど動画を見ていただきましたが、大型鳥類の躍動的な群の姿を是非間近に見たいという方も多くいらっしゃいます。海外から来るお客様にも大好評です。今後のインバウンドでもひとつの目玉になるのではないかと思っております。関連商品の開発や販路拡大も進めているところでございます。

まとめさせていただきますと、渡り鳥との共生のまちづくりの取組は、まさに地域での経済活動や環境活動、子どもたちをはじめとする人づくり、シティプロモーションというかたちで大きく発展してきたところです。渡り鳥との縁で気づかせてもらったこと、震災などで持続可能な資源循環型社会というものの必要性を認識したこと、これらの相乗効果もありまして、今、この地域になくてはならない市民活動であり、大崎の売りということになっています。そして、この渡り鳥との共生のまちづくりの取組をさらにステップアップしていこう、大崎の取組を次の時代に丸ごとつないでいこうという考えから、また、持続的発展という意味も込めて、FAO（国連食糧農業機関）世界農業遺産への認定申請の準備を行っているところであります。

今日ご出席の佐渡をはじめとした皆様の先進実例がございますが、大崎も同様の取組をしてまいりたいと思っています。とくに大崎の場合は、渡り鳥に気づかせていただいた、縄文の森から湧き出るきれいで豊富な水、地域資源、そして母なる川に抱かれた、まさに生産、生物を育む豊饒の里、大崎耕土があるということ（図−12）。また、そこから生み出された稲作文化、農村文化、食文化というものの宝庫であるということ。これらを次の世代に引き継ぎ、ステップアップしていきたいと考えているところであります。そして、それらの思いが結実いたしまして、今年の秋、期待の星、新しいお米が誕生しました。各地においしいお米がありますが、日本

図−11

図−12

のお米は、今8割以上がコシヒカリ系になってしまいました。しかし、かつてのササニシキ系は、あっさりして冷たくなってもおいしい、とりわけおにぎりや和食に大変適しています。このササニシキのおいしさを引き継いだ新しい品種「ささ結」です（図−13）。生産者と、消費者、各地域と結ばれていこうという思いを込めて、今年、デビューしました。「ささ結」は、粘り控え目、あっさり、サラサラ系で大変においしいお米です。皆様方にも是非ご賞味いただければと思っております。ささ結についてご紹介を申し上げて、私からの報告にさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

図−13